

# 『隠された子供の叡知』

言語テラポイト

演出家

川手 鷹彦



一九九一年の春から夏にかけて、私はドイツ北部、バルト海近くの小村ブリーストルフにある治療教育施設「ハウス・アーリルド」に暮した。美しい森、幻想的な海岸、めまぐるしく変わる天候、それらすべてが私の心を揺さぶったが、何にも増して私の魂の琴線を振るわせたのは、施設の子どもたちのひたむきな努力の様子と、それを見守り、また己の身を拋<sup>なげう</sup>つて彼らの生きる力の向上に尽くす職員達の姿であった。

「まず朝九時にグループの大人たちの引率でルークの家のホールに全員が集い大きな輪をつくる。一日の始まりはとても重要であり、数人の教師が知恵を出し合って十五〜二十分の時間の使い方を検討する。週毎・月毎

の格言や詩の朗読があり、弦楽奏や一部の子どもたちも参加する笛の合奏があり、またみなで合唱する季節の歌がある。大人たちの真摯さと子どもたちの魂の柔らかさが微妙に折り合わさり、今日がまたかけがえのない一日であることを感じさせるひとときである。…中略…ここの人々は、毎朝このように心を淨めて一日を始めるのである。」（本書より）

そこを支配していたのは、普段の私達の生活とは明らかに違う行為の規範と美意識であった。そして右に掲げた「朝のうた」だけでなく、一切の生活、子どもたちに対する治療教育の全てが、考えぬかれ周到に準備され、藝術的に造形されていた。

このような目を疑うほどの教育の理想の実現を体験した私は、それをひとりでかかえることができず、手紙の形式にしたためて、スイスと日本の友人達に送り続けた。私はまた、自らが施す言語テラピーと芸術教育の有り様も書き送った。「呼吸」や「歩行」という人間の基本的な営みを少し意識的に見てやるだけで、子どもの身体に著しい変化が見られ、また古今の優れた物語詩や抒情詩に息づくリズムやファンタジーが豊かな滋養となつて彼らの心身に働きかけてゆく…様子である。

ペスタロッチの「シュタンツ便り」に肖あやかつて名づけた、この「ブリーストルフ便り」は、哲学者中村雄二郎氏の目にとまり、氏が当時同人をされていた岩波書店の『へるめす』に編集連載された。それに加筆したものが、本書の第一部である。

さて、「ブリーストルフ便り」を書き終え施設を後にした私は、心中子どもたちへの想い止まず、「便り」には書けなかつた彼らとのより親密な心と心の触れ合いの一部始終を書き留めた。本書第二部の「回想」である。

そこには、私が特に愛情を注いだ「森の家」の子どもたちとの出会いが書かれている。そばかすが可愛く食事のときは必ず私の右隣に坐り、一日の出来事をとつとつと話す「盗癖」のハンス・ユルゲン、私に生きる道としての治療教育の確信を与えてくれた事件の当事者である「てんかん」のゲツツ…、それはまた私の内面生活、言わば「魂の報告」でもある。

そして第三部は、近年の施設再訪における非行少年たちとの関わりを中心に書かれている。彼らとの出会いは、今世界的に見られる文化の閉塞、社会の末期的症状に、心柔らかな若者たちが絶えきれず暴発することの事実に私を向き合わせてくれもした。いわゆる「発達遅滞」を

伴った彼らの「非行」は狂暴で危険だが、反面、彼らの心の傷は深く、助けを求める叫びも切実なのである。

その切実な心の叫びを、更には彼らが心の奥底で真に望んでいることを、私はできる限り正確に聞き取って、それを少しでも多くの人々に伝えたいと思つた。何故ならそのことが「病い」や「障害」の本質を知ることにつながり、次代の教育の在り方へのひとつの道標になると思つたからである。

なお、本書出版を記念して講演会が行われる。

日時——一九九九年一月三十一日(日) 十四時半より

会場——東京お茶の水、山の上ホテルにて

講師——中村雄二郎・川手鷹彦

申込・問合——「青い丘」TEL〇三一五四七四一一〇三九